

第47回城戸賞応募作品

# 帯びる

大沢ケイト

・「登場人物表」

村上サエ（26）農家の女性  
日高疾風（27）織物職人  
和田美弥（16）高校生  
太田駿季（28）テキスタイルデザイナー  
日高昭二（59）疾風の父  
真島平吾（35）農家の男性  
和田武（42）美弥の父  
日高満琉（11）疾風の弟  
御園トシ（88）おかげ島の長老  
新町和彦（28）太田の友人  
神主（50）神主  
日高まつ（50）疾風の母  
運転手（60）タクシー運転手  
店主（40）ラーメン店店主  
仲居（60）旅館の仲居  
真由美（17）女子高生  
友梨佳（17）女子高生  
谷川由華（26）太田の彼女  
天気予報士（33）テレビの天気予報士  
観光客A（50）男性観光客  
観光客B（24）観光客Aの連れの女性  
フロント（30）ホテルのフロントマン  
村 upper はる（56）サエの母

○おかげ島・全景  
海の中にポツンとある島。

○日高家・外観  
平屋一戸建て

○同・プレハブ小屋・外観  
機織りの音。

○同・同・内  
日高疾風（27）が機織り機で龍の文様が浮き出た鮮やかな布を織っている。真つすぐな瞳。空の鳴る音に顔を上げ、窓から外を見る。

○畑  
村上サエ（26）、精力的に畑仕事をしているが、空の鳴る音に顔を上げ、空を見上げる。首には首飾りが光る。

○空  
怪しい雲行き。

○畑  
空を見ているサエに道から学生服の和田美弥（16）が声をかける。

美弥「サエちゃん」  
サエ、美弥にっこりする。美弥、畑に入ってくる。

美弥「お父さんがサエねえちゃんところに泊まってもいいって」

サエ「ほんと？いいって？」

美弥「うん」  
サエ「うれしい。楽しみだあ」

美弥「美弥も！龍の花嫁の踊り、マスターしなきゃね。あ、綺麗」

美弥、サエの首飾りに気づく。

美弥「これは龍の花嫁の？」

サエ「うん。そうだよ。美弥ちゃんが花嫁になるときにはあげるね」

美弥「うれしい！」

サエ、美弥の頭をなでる。空が鳴る。サエと美弥、空を見上げる。サエの首飾りが光る。

○日高家・プレハブ小屋・内

疾風、窓からじっと空を見上げている  
疾風「嫌な予感ほどよく当たるんだよな」

機織り機の前に座り、厳しい顔で織り始める。

○畑

木陰で休むサエのところに真島平吾（35）が回覧板を持ってやってくる。

真島「サエちゃん」

サエ「真島さん。（回覧板を見て）あー、前も言っただけど回覧板は家の方に持ってって。お母さんいるし」

真島、何か言いたげ。

サエ「お願いね」

サエ、空を見る。

真島「空？」

サエ「ちよつと変な天気じゃない？」

真島、サエの首飾りを見ている。

サエ「なに？」

真島「龍の花嫁、ほんとになるの？」

サエ「ああ。そうなの。うん。柄でもない？」

真島、回覧板を曲げ始める。

真島「少しくらい相談してほしかったなあ」

サエ「（回覧板を気にする）え？あ、そう？」

真島、すっかり回覧板を折ってしまった。

真島「そうだよ。だって龍の花嫁になったら、結婚できないんだよ？」

サエ「それはうん。承知の上で。ほら、私、結婚するあてないし。龍の神様に結婚してもらおうと思ってる」

真島、回覧板を力任せに遠くに投げる。

真島の視線に、サエ目をそらす。

サエ、汗をぬぐい、顔に泥がつく。真島が泥のついたサエの顔に手を伸ばす

サエ「ちよ」

真島「あ、泥がついてたから。ここ」

サエ「あ、ああ。大丈夫、自分で」

サエ、汚れた手で顔をぬぐい、余計黒くなる。サエ、あわてて行ってしまおう。サエをじっと見送る真島。カエルの鳴き声。真島の足元に黒いヒキガエル。ヒキガエルは逃げて行き、真島、眉をしかめる。

○病院・外観

○同・病室

御園トシ（８８）様々な管に繋がれている。

トシ、口をもぐもぐさせている。

○日高家・機織り小屋・外

日高昭二（５９）が腕を組んで空を睨んでいる。

昭二「ムズムズするな」

小屋の中に入り、ぴしゃつと戸を閉める。

○同・同・内

薄暗い小屋の中、昭二が精力的に黒い布を織っている。龍の文様。機織りの音が響く。

○同・同・外

機織りの音がする中、戸の近くに黒いヒキガエルがやってくる。

○都内・全景（夜）

○太田のマンション・外観（夜）

太田駿季（２８）が暮らす小規模マンション

太田の声「パーティー？」

○同・太田のワンルーム（夜）

デスクとベッドと棚がある。

棚にトロフィーや盾。ホコリをかぶっている。壁にはトロフィーをかかげる太田の写真や、織物が飾られている。

太田駿季（28）はビール片手に「テキスタイルデザイン大賞 受賞式とパーティーのお知らせ」を読んでいる。

太田、立っている新町和彦（28）にお知らせを渡す。新町、笑顔で

新町「行くでしょ？」

太田「ノミネートもされてないのにこのこの行けねえよ。新町は大賞なんだから行ってくれば。ここ料理美味しいよ」

新町、口を尖らせて

新町「太田と一緒に行きたいんだよ。新旧の大賞受賞者が顔を揃える：っていい話題になると思わない？」

太田「俺はいいって。それに20日は由華の誕生日」

新町「まだ続いているんだ」

太田「細々とね」

新町うれしそうにベッドに座って

新町「この間、大賞とった報告に大学のぞいたんだよ。懐かしかったわー。あ、そうだ、おっさんからこれ」

新町、太田に写真を手渡す。トロフィーを持ちおっさん（沖野教授）（52）の横に立つ太田の写真。

新町「おっさん、太田のこと気にしてたよ。あいつどこに向かってんだって。まあ適当に言っといたけど」

新町、足元の空の酒瓶を手取る。

太田「：ありがと」

新町「いいって！だから行こう授賞式。パーティー騒ごう」

太田が壁のカレンダーを叩くと

新町「どうせ由華ちゃんとのデートは夜だろ？夜景の見えるレストラン。授賞パーティーは昼！受賞パーティーからのバスパーティー。昼から夜。完璧。というわけで7月20日。プラザホテル12時。よろしく」

新町、出て行く。  
太田、写真を破って投げる。  
× × ×  
深夜。ビール片手にパソコンで旅行サイトを見ている太田。7月20日を選択する。

○大海原（朝）

フェリーが進んでいく。

○フェリー・デツキ（朝）

手すりにつかまり潮風に吹かれている太田。

谷川由華（26）の音がする。

由華の声「はあく？旅行？どういうこと？私の誕生日は！？夜景の見えるレストランは？」

○フェリー・デツキ（朝）

手すりによりかかって電話するサングラス姿の太田。周りを気にしている。

太田「ごめん。帰ってから埋め合わせするから。え？いやだから、来年二年分まとめてお祝いするよ。ケーキにロウソクを倍の数立ててあげるから。ね？」

スマホを持ち直す太田。

太田「『テキスタイルデザイン大賞』？あー、そういえば新町くんがそんなこと言ってたな。新町くん、いい奴なんだよ。忘れてたことを思い出させてくれるっていうかさ。親切だね。まあ、正直俺、賞レースもう飽きちゃったのよ。興味ないんだよね。うん」

由華の声「はあ、そうですか。それで太田くんはどこに向かっているんですか？」

○大海原（朝）

進むフェリー。周りに島はない。

○フェリー・デツキ（朝）

スマホを耳に当てたまま海を眺める太田  
太田「どこかなあ。俺、正直迷子なんだよね。」

どこだと思う？」

由華の声「知らない。どこでも好きなところ行ったら？じゃあ楽しんで。もう帰ってこなくていいよ」

太田「え？由華？おいー。切ったよ」

太田、スマホを苦々しい顔で見ながら、海を見る。

○タイトル『帯びる』

○元島・全景

大きな島。フェリーが向かっている。

○同・港

港にフェリーが入港する。  
以降、元島。

○船着き場

フェリーから降りる太田。後ろから来た客が太田にぶつかり謝りもせず行ってしまう。太田、顔をしかめる。

○タクシー乗り場

タクシーに近づく太田。後ろから来た客に先を越される。にらむ太田。背後からタクシー運転手（60）が近づく。

運転手「タクシーどう？安くしとくよ」  
振り返る太田。

○道

島内を走るタクシー。

○タクシー車内

窓の外を眺める太田。運転手が話しかける。

運転手「そりやね、東京に比べたら何にもないよー、何にもないのがこの元島のいいところなのよ」

太田「なるほど」

運転手「お客さん、お昼はどこで食べるか決



まってる？」

太田「ぼんやりとして

太田「なんも決まってるないっす」

○ラーメン屋・外観

小さなラーメン屋。近くにタクシーが  
停まっている。

○ラーメン屋・内

運転手と太田、カウンターでラーメン  
を食べている。

運転手「ねえ？言った通りでしょ？おいしい  
でしょ、このラーメン」

太田「あ、はい……」

運転手「東京にもたくさんおいしいものある  
と思うけど、この元島ではこのラメ  
ンが一番！ね、大将？」

運転手、カウンター内の店主（40）

に話しかける。店主、機嫌よく

店主「いつもありがとうございます」

運転手「（太田に）この漬物もうまいんだ」

運転手、太田に漬物の入ったケースを  
渡す。

太田はスマホで「テキストスタイルデザイ  
ン大賞」授賞式の配信を見ながら漬物  
を大量にラーメンに入れる。満面の笑  
みの新町と受賞した作品が映る。太田、  
スマホを伏せてラーメンを勢いよく食  
べる。

太田「辛！」

運転手「お客さん、いくらなんでも入れすぎ  
だよ」

太田、水を飲もうとしてこぼす。

運転手「あーあー」

太田「すみません」

店主「（台拭きを渡して）どうぞ。これで拭  
いてください」

運転手が台拭きを受け取り拭く。

運転手「あーあー、ビショビショだ。服、大  
丈夫？」

太田「大丈夫です。ほんとすいません」  
運転手「ちよつとコップ持ち上げて」  
太田、コップやコースターを持ち上げる。コースターの龍の柄に気づき、しげしげ見る。

○道

島内を走るタクシー。

○タクシー・内

後部座席に座り、コースターを裏表見る太田に運転手が話しかける。

運転手「その織物の名前？ 締龍（しめりゆう）って言いますね」

太田「締龍？」

運転手「龍を締めるって書いて、締龍。この島から又船で行ったところにおかげ島って小さな島があるんですよ。織物が有名でね。まあ有名って言ってもこの辺でだけよ」

太田「へえ。」

太田、コースターの織りを指で確認している。

運転手「お客さん、おかげ島行くの？」

太田「おかげ島？ ああ、いや特に」

運転手「行くなら、甥っ子が船出しますんで、連絡ください。」

運転手、太田に名刺を差し出す。

運転手、笑顔で

運転手「安くしときますんで」

○旅館・外観（夜）

小さな旅館。灯りが灯っている。

○同・和室（夜）

浴衣姿の太田が布団の上でスケッチブックに締龍の柄を書いている。コースターを表裏見ながら、

太田「締龍。龍を締める、か。ま、今時じゃないよなあ、こういうのは。インスピレーション

ン……」  
LINEの着信音。太田、スマホを見る。  
トロフィーを持ち満面の笑みの新町の写真。  
真。太田、スマホを放り投げる。

○同（朝）

テーブルの下にビールの空き缶が5、6本とくしゃくしゃに丸めた紙がいくつも転がっている。スケッチブックは開かれ、縮龍の柄が描かれている。  
畳に寝転がる太田。仲居（60）が布団を畳む。

仲居「お若いのにどこにも出かけなくて退屈じゃないですか？海とか行ったらどうですか。マリンスポーツとか。この島の海は綺麗ですよ」

太田、顔を上げて

太田「おかげ島ってどんなところですか？」

仲居「おかげ島？」

太田「縮龍っていう織物を見たいんですけど。（コースターを渡して）これ」

仲居、首をかしげ、コースターを返す。

仲居「縮龍？ あゝ、よく知らないけどおかげ島にいったらあるんじゃないですか。名産っていうくらいだし」

太田「そうですか」

再び寝転がる太田の横に仲居が座る。

仲居「でもね、あの島、ちよっと怖いんですよ」

太田「怖い？」

起き上がる太田。仲居うなずいて

仲居「いろいろ良くない噂がね、あるから。こだけの話、あんまり行かない方がいいと思いますよ。私が言ったってないしよね」

仲居、肩をすくめ出て行く。太田、財布から名刺を出し、電話をかける。

太田「あ、もしもし。この間タクシーに乗せてもらったものなんですけど、おかげ島まで船出せますか？」

○小型船・船上

海に行く小型船。太田が乗り込んでいる。前方におかげ島が見えている。

○おかげ島・全景  
山に雲がかかっている。

○サエの家  
おかげ島のサエの家。一軒家。以降、おかげ島。

○同・和室  
サエが龍の掛け軸の前に正座している。掛け軸の前に三宝に乗せた首飾り。  
サエ「結婚する相手がいないからって。大変失礼を申し上げます。こんな花嫁ですみません。明日はどうかお手柔らかにお願いします。顔を上げ、下がろうとして振り向くと目の前に大きな黒いヒキガエル。サエ、驚く。

サエ「え？カエル？」  
部屋の四方八方から小さな黒いヒキガエルが出てくる。

サエ「え？え？え？やだ」  
ヒキガエルがじりじり近寄ってくる。  
サエ「これはひよつとして島に禍（わざわい）をもたらすという黒いヒキガエル？まさか」  
サエ、身を翻し、首飾りに手を伸ばす。  
サエに、ヒキガエルたちが飛びかかる。  
サエの悲鳴が響き渡る。

× × ×  
村上はる（56）が障子を開けると大小無数のヒキガエルがサエに群がっている。  
サエ「お母さん！助けて」  
はる、悲鳴を上げる。

はる「サエ！」  
落ちている首飾り。

○山道  
黒いヒキガエルにまわりつかれたサエが体から振り払うように腕を振り回し走

真島「サエちゃん！止まれ！サエ！」  
っている。真島が後から追ってくる。

○岬・上

走ってきたサエ、崖の上で立ち止まる。  
真島、走ってくる。

真島「サエちゃん。こつち来い」

サエ、首を振る。

サエ「私、ここから飛び込むわ」

真島「なに？サエちゃん、無茶するな」

サエ「大丈夫。もうこれしかない。真島さん」

サエ、首飾りはずし、真島に投げる。

受け止める真島。

サエ「これ、お願い」

サエ、身をひるがえし飛び込もうと構える。

真島「サエちゃん！」

サエ、崖から飛び出す。

真島「サエちゃん好きだ！」

サエ、飛んだ状態で振り返り、驚いた顔のまま落ちていく。

○港・栈橋

小型船から栈橋へ降りる太田。

誰かの声「あつ！」

岬を見上げる太田。

○岬・全景

海に落ちていく人影。

○岬・上

真島、崖の下をのぞく。

真島「サエちゃん！」

その手に握られた首飾り。

○港・栈橋

呆気にとられる太田。人々が騒ぎながら走っていく。

栈橋に小さく「おかげ島へようこそ」の文字。

○道

歩く太田。向こうから島の住人が走ってくる。

太田「すみません、あの」

走りすぎる島の住人。

○分かれ道

道が二手に分かれている。太田、見比べる。山の方からかすかに三味線の音が聞こえる。太田、山の方へ歩いていく。

○山道

ゆるやかな山道を歩く太田。汗を拭く。三味線の音が近づいてくるが急に止まる。太田、足を止め耳をすます。

○広場・全景

広場の真ん中に舞台がある。

○同・舞台

舞台上で美弥が三味線を持ち座り込んでいる。小学生女子が数人立ち止まり、大声で呼んでいる。

女子たち「美弥ー。美弥ちゃん」

女子たち「サエ姉ちゃんのこと聞いた？」

美弥、反応しない。女子たち去る。

太田が疲れた様子でやってきて女子たちとすれ違う。

太田「あ、ちよつといいかな」

女子たち行ってしまふ。

美弥、三味線を弾きだす。

太田、美弥を眺めているが声をかける。

太田「こんにちは」

美弥、三味線を弾くのをやめ太田を見る。

太田「三味線の練習？」

美弥、無言。

和田武（４２）が急いでやってくる。

武「美弥！」

武、美弥に

武「な、なにしてんだ」

太田「娘さんですか。すみません、僕、船でこの島に来たばかりで」

武、太田を無視して美弥に

武「さ、サエのこと聞いたか？」

太田「（ため息をついて）俺、この島の人には見えないのかなあ」

太田、飛ぶまねをする。

武「み、見えてるよ」

太田「よかった。マジで透明になったかと思っただ」

武「あ、あんた、ラッキーだよ」

太田「え、ラッキー？なにがです！？」

武「こ、この子に会えたからさ。この美弥は特別な子なんだ。いいことあるよ？」

美弥、武を見る。

太田、キョトンとするが

太田「そうなんだ、いいことあります？ラッキー？」

武「らラッキー、ラッキー」

太田「やった！」

武「で、あ、あんたどこ行くの？町？海？」

太田「あの、僕、縮龍を見たくて」

武「し、縮龍？ああ、織物か」

日高満琉（11）が舞台を横切って走っていく。

武、満琉を呼び止める。

武「こら、満琉！」

満琉、振り返る。

武「ぶ、舞台、横切るなって言ってるんだろ。お客さん、おまえんちに案内してやって」

武、太田を指し示す。

満琉「（小声で）年中酔っ払いがえらそうに。（大声で）サエねえちゃんがさあ」

美弥が進み出る。満琉、決まり悪そうにして、太田をじろっと見るが、走って行って振り返り、太田を呼ぶ。

満琉「おじさん、こつち」

太田「おじさんって。（武に）ありがとうございます

います。」

太田、満琉の方へ走っていく。

見送る美弥と武。武、美弥の三味線を持ち、眺めてうれしそうに

武「み、美弥、喜べ。きよ、今日からおまえが龍の花嫁だ」

武を見る美弥。

### ○山道

太田は満琉の後を歩いている。

太田「さつき飛び込んだ人、知り合い？」

満琉「サエねえちゃんのこと？飛び込むの見た？」

太田「遠目で」

満琉「生きてる？」

太田「いや、そこまでは」

満琉「見てないのかあ」

太田「うん。ごめん」

満琉、太田をちらつと見る。

満琉「おじさん、この島に何しに来たの？」

太田「おじさんって引つかかるなあ。あのね、知らないかもしれないけど、締龍っていう織物を見にね」

満琉「締龍！？」

満琉、立ち止まる。

満琉「締龍はうちで作ってるんだぞ」

太田「え！そうなの？」

満琉「うん。父ちゃんも母ちゃんも兄ちゃんも締龍織りだ」

太田「あ、それはうれしい。見せてもらえるかな？」

満琉、得意そうにうなづく。

満琉「祭りにさ珍しい締龍いっぱい飾られるよ」

太田「祭り？」

満琉「でもサエねえちゃんが死んじゃったら祭りやらないかもな」

### ○日高家・玄関・内

壁に龍に乗った花嫁の織物が掛けてある。



疾風が奥から出てきて出かけていこうとする。

満琉が玄関から入ってきて、疾風をちらっと見てから奥に行く。

遅れて太田が入ってくる。

疾風「なにか？」

太田「あ、こんにちは。ええっと（奥をさして）今の子が泊まらせてくれるって言うんですが、ここ旅館じゃないですよねえ」

疾風「ああ。いや、旅館みたいなもんですよ」

太田「え？そんなんですか？さっきの子のお父さん？」

疾風「（気を悪くして）そんな年に見えます？兄です」

太田「あ、いやいや若いお父さんだと思ったんですよ。：すいません」

満琉が奥から戻ってくる。

満琉「（疾風に）なんだよ」

疾風「兄に向かって「なんだよ」とはなんだ」

満琉「俺のお客に気安く話しかけるなよな」

太田、壁の織物に目を止める。

太田「あ！これ締龍だ」

疾風「へえ、締龍知ってるんですね」

太田「ええ、ちよつと興味が。この龍に乗ってる女性は神様か何か？」

疾風、織物をじっと見る。

疾風「これは：」

満琉「龍の花嫁だよ、おじさん知らないの？」

太田「龍の、花嫁？」

満琉「うん。締龍知ってるなら当然知ってるもんだと思ったよ。あ、そうだ。おじさん、泊まれるよ。安くしとくって。」

満琉、太田にニヤツとしてから、疾風に

満琉「俺のお客だからな」

疾風「とらねえから安心しろい」

疾風、太田の肩を叩き、出かけていく。

満琉「（疾風に）なあ、祭りやるの？（太田に）上がって。汚いとこだけど」

太田「てことは旅館じゃないんでしょう？いいの？泊まって」

満琉「いいのいいの」

### ○商店

生活必需品が揃う小さな店。店の前のベンチで真由美（17）と友梨佳（17）が二人、飲み物片手に話をしている。

友梨佳「祭り、中止かな」

真由美「龍の花嫁があんなことになったから中止でしょ」

友梨佳「でもオヤジが言ってたけど、祭りは止められねえって」

二人、飲み物を飲む。

友梨佳「サエちゃん、崖から海に飛び込むって。やつぱり嫌だったのかな、花嫁」

真由美「そりゃそうでしょ。彼氏も作れないし、島からも出ちゃいけないでしょ。この時代にも人権無視だと思わない？」

友梨佳「サエちゃん、つきあってる人いたのかな」

真由美「いたら龍の花嫁になんかならないよ」

友梨佳「それもそうか。次、誰が花嫁になるのかな」

真由美「絶対嫌」

友梨佳「私もー」

### ○トシの家・外観

古い日本家屋。一台の車が止まる。

### ○同・広間

広い畳敷きの和室。

龍の絵の描かれた屏風を背にしてトシが点滴その他をつけたまま、座っている。両脇に医者と看護師がそれぞれ座る。

美弥がトシの前に座っている。武、昭二、疾風が正座している。武、うれしさを隠しきれず落ち着かない。

昭二「武よ。うれしそうだな」

武「そ、そんなこと。急なことで驚いてるんだ」  
昭二「サエがあんなことになっちまったからなあ。美弥、おまえどうだ？花嫁やれるか？」

トシ、美弥に囁く

美弥「（昭二に）婆様が『帯は織れたのか』って」

昭二、黙っている。

疾風「オヤジ」

昭二「あと少しだ」

美弥「（トシの言葉を聞いて）間に合わせろって」  
昭二「面倒くせえなあ。古い立派な帯があるんだからそれを使おう。元々そうするって話じやなかったか？」

疾風が手をあげる。

疾風「新しい帯なら俺のを使ってくれよ」

昭二「なんだおまえ」

疾風「俺の織った帯を祭りで使ってほしい」

昭二「素人はすっこんでろ！」

疾風「俺も職人だよ。あんたは認めようとしねえけどな。あんたにはまだかなわないかもしれないけど、俺」

昭二が疾風を殴る。疾風、殴られたところを押さえて

疾風「痛つて〜」

昭二「まだかなわないかもしれないけど？俺と並ぼうって根性が気に入わねえなあ」

疾風「あのなあ、オヤジは気に入らないみたいだけど、俺だって巷じゃ評価されてんだわ。見る人が見たら俺の方がうまいって言うわ」

昭二、疾風につかみかかる。

昭二「巷だど。どこの巷だ。おまえの言う巷はこの小さい島のことだろうが」

疾風「それはオヤジも一緒だろ！？」

昭二「誰が織っていいと言った！」

疾風「誰も言っただけよ」

昭二「誰の許しを得て織ってんだ」

疾風「許しなんかもらってねえよ。そもそも許しなんかいるのかよ！」

昭二「当たり前だ！」  
昭二と疾風、トシを見る。トシ、首を振る。

疾風「ほら見ろ！婆様、首振ってるじゃねえか」  
昭二「婆さんは黙ってる。これは俺とこいつの間の話だ」

疾風「婆様が絶対に決まってるだろ。この島で

一番偉いのは婆様じゃねえか！」

トシ、美弥に囁く。

美弥「婆ちゃんが向こうでやれって」

武「うるせえなあ、もう。今日は花嫁の話じゃないのかよ」

真島が音を立てて襖を開ける。

疾風「真島さん」

真島、顔を赤くし背丈ほどもある焼き

物のタヌキと酒を持ってきて座り、酒を  
あおる。

疾風「このタヌキ。小学校に置いてあったやつ  
だろ。どうすんだよ、こんなの持ってきて」

武「ひ、昼間から酒飲んでいいご身分だな」

真島、ろれつが回ってない。

真島「働いた分全部飲んじゃもうやつに言われて  
も聞こえない」

武「な、なんだとう？」

美弥「お父さん。ほんとのことだから」

武「お、おう」

真島「おまえらがこんなに冷たい人間だとは思  
わなかった」

昭二「なんだと？」

真島「おまえら、サエちゃんの心配したのかよ」

疾風と昭二、顔を見合わせる。

昭二「すまん」

真島「してないのかよ！」

疾風「早く次の花嫁決めなきゃならないだろ、  
祭り明日なんだから」

武が割って入る。

武「次の花嫁は決まってる。美弥だ」

疾風「あんたそう言うけど、美弥はいいのか。  
まだそのつもりなかっただろ？な？美弥？」

美弥、うつむいている。

武「やるよな？美弥」

真島「おまえら、ほんとに血も涙もないな」

疾風「真島さん、気持ちにはわかるけど言わない  
でよ、血も涙もないとか。皆辛いんだよ」

昭二、あくびをする。

真島「あれが辛い態度かよ」

疾風「爺、眠いなら家で寝とけよ！」

昭二「親に指図するな、素人」

真島「おまえらサエちゃんの気持ちも考えろよ」

看護師がトシの両耳を塞いでいる。

松葉杖をついたサエが襖を音を立てて開ける。松葉杖をついて入って来る。

サエ「もういいよ、真島さん。私が悪いんだから」  
美弥「紗栄ちゃん！」

昭二「サエ、大丈夫なのか」

サエ「うん。飛び込むのは慣れてるつもりだったんだけど、ちよつとしくじったわ」

疾風「すげえな、さすがサエ。普通死ぬわ」

美弥、サエにしがみつく。

サエ「いたたたた」

美弥「あ、ごめんね」

サエ「いいのよ。美弥ちゃん。ごめんね、ちよつと席はずしてもらっていいかな」

美弥と武、部屋を出て行く。

サエ、トシの前に座り、自分の変色した腕を触る。

サエ「ヒキにやられたものは花嫁になれない。  
そうだよね、婆様」

トシ、うなづく。

トシ「そうじゃ。龍はヒキをもっとも嫌う」  
疾風「それじゃあ美弥がやるしかないのか？」

サエ「美弥ちゃんには花嫁はまだかわいそうだと思う。まだ高校生なのに」

昭二「じゃあどうする」

サエ「今年の祭りは延期にするとか」

全員、トシを見る。

× × ×

美弥がトシの前に座っている。美弥、うつむく。

トシ「どうじゃ、美弥」

美弥「私」

サエ「美弥ちゃん、よく考えて。無理強いはできない。いろいろ我慢しなきゃいけないことも多いし」

昭二「サエ、さつき祭りは延期できねえって婆さんに言われただろうが」

サエ「でも」

昭二「でもも糞も無い」

疾風「汚ねえなあ」

昭二「花嫁には準備金がたんまり出るじゃねえか、サエももらっただろ？悪いことばかりじゃねえよなあ、武」

武、ギクリとした顔。美弥、武を見る。  
うつむく武。

サエ「(昭二に怒り)あんた、ちよつとどこまで  
デリカシーが無いの」

疾風「ほんとだよ。そんな言い方したら美弥が  
金で、その、……かわいそうだよ！」

昭二「花嫁も糞も出すときは出さなきゃいけ  
ねえんだよ。わかったか」

疾風「花嫁と糞と一緒にすんなよ」

サエ「二人とも黙ってくれる？」

武「み、美弥」

美弥「私」

美弥、顔を上げる。

美弥「私、やります。龍の花嫁」

辛そうな顔のサエ。トシ、うなずく。  
おどおどした顔の武。

#### ○日高家・外観(夜)

#### ○同・機織り部屋(夜)

機織り台の前で日高まつ(50)が満琉  
の肩に手を置き、ニコニコして立っている。  
太田がしげしげと織りかけの織物を見  
る。

満琉「(まつに)ねえ俺のお客だからね。約束の

小遣いくれよ」

まつ「わかった。あとでね」

満琉「あとでっていう」

まつ「あとではあとで。面白いでしょう、締龍」

太田「模様が独特ですな」

まつ「細かい記号みたいなのが多くて、織るの  
が厄介なの」

太田「この記号には意味が？」

まつ「あるらしいんだけどね、よくわかんないの、  
私。父ちゃんなら知ってるだろうけど」

○道（夜）

昭二の後から疾風が追いかけてくる。

昭二「さあ、忙しいなあ。帰って帯を仕上げるか」

疾風「間に合うのかよ」

昭二「プロの『もう少し』はほとんど完成してんだよ」

疾風「そうなのか」

昭二「婆にちよつともったいぶって言ったただけだ。

期待持たせて悪かったな」

疾風、むかついた顔で

疾風「うるせえ。言ってる」

昭二「おまえにはまだ継がせねえよ」

疾風「まだ？いつかは継がせるつもりあんのかよ」

昭二「百年早いんだよ！」

昭二去る。悔しそうに見送る疾風。

○日高家・機織り小屋・外（夜）

小屋の前に立つ太田と満琉。中から機織りの音が聞こえている。

満琉「父ちゃんの機嫌が良けりや会えるけどなあ」

満琉、耳をすましている。

太田「音でわかるの？」

満琉、首を振る。

満琉「今日はダメだな」

満琉、向こうへ行ってしまう。

太田、耳をすますが首を振りながら満琉の後を追う。

○日高家・機織り小屋・内（夜）

昭二が鼻歌を歌いながら機嫌よく機を織っている。突然胸を押さえて呻く。崩れ落ちる。

○日高家・太田の部屋（夜）

太田が窓の棧に腰かけ外を見ている。畳の上に美弥を描いた絵が数枚散らば

っている。

満琉がそっと入ってくる。畳の絵を見て

満琉「これ、美弥？」

太田「（驚いて）びっくりした。ノックくらいしてよ。そうだよ」

満琉「絵うまいね」

太田「似てる？」

満琉、顔を上げ

満琉「美弥はもっと悲しそうな顔してるな。ねえ、おじさん、織物するの？」

太田「うん。でも、もうやめるんだけどね」

満琉「やめるの？やめるのに締龍見に来たの？」

太田、窓から月を見る。

太田「理由が欲しいんだよね、やめる理由が。自分がかかわらないなつてもものを見たら、あきらめがつくかなって、」

振り向くと満琉はいない。

太田、なんだよという顔をする。

○美弥の家・外観（夜）

小さな家

○同・リビング（夜）

武が酔いつぶれて寝ている。酒瓶がいくつも転がっている。テーブルの上に開かれた祝儀袋の中と大金が置いてある。

○同・美弥の部屋（夜）

勉強机の横に布団が敷いてある。ランドセルが置いてある。薄暗い部屋に窓から明かりがさし込んでいる。膝を抱えて座っている美弥。

満琉の声「美弥。美弥」

美弥、窓を開ける。紙飛行機が窓から入ってくる。美弥、紙飛行機を拾い、開いてみる。笑顔で踊っている美弥の絵。美弥、絵を見て、窓の外をのぞく。

○道（夜）

満琉が美弥の部屋を見上げている。美



弥が窓から顔をのぞかせ手を振り、窓を閉める。満琉、窓を見い見い帰っていく。

○機織り小屋（夜）

疾風が戸を開ける。

疾風「オヤジ、起きてんのか？寝るなら家で寝ろよ」

機織り機の横に倒れている昭二。疾風  
駆け寄る。

疾風「オヤジ！」

○道（朝）

店の前のベンチで髪の毛をなおす真由美と友梨佳。

真由美「聞いた？美弥ちゃん花嫁やるって。かわいそう」

友梨佳「お母さんが言ってたんだけど、たくさんお金もらえるんだって、花嫁になると」

店の裏からビール缶片手に武が出てきて、足を止める。

友梨佳「美弥ちゃんち、父親がさ」

真由美「そっか。だからか。お金のためか」

友梨佳「父親は選べないもんね」

武、真由美たちに近づく。

友梨佳「（武に気づき、真由美に）ちよっと」

真由美「えっ」

武「おまえら今なんの話してた」

友梨佳「なんでもありません」

武「嘘つけ。俺の悪口言ってただろ」

真由美「言ってません」

友梨佳と真由美、走って逃げる。武、追いかける。友梨佳たち悲鳴を上げて逃げていく。武、あきらめてビール缶を地面にたたきつける。

○舞台

踊りを練習する美弥。舞台下で松葉杖のサエが見ている。武が現れ、美弥に近づくと、美弥の腕を引っ張り連れて行く

うとする。抵抗する美弥。

サエ「武さん。どうしたの」

武、美弥を引き倒し、足蹴にする。

サエ「やめて！なにすんの」

武「お、俺じゃねえ」

サエ「え？」

武「お、俺が龍の花嫁にしたいって頼んだんじやねえ！さ、サエが怪我したから。そ、それを金が欲しいからって島のやつらが」

サエ「ごめんない」

美弥「もう決まったことだから、お父さんは黙ってて」

武「み、美弥」

美弥「美弥がやると言ったんだから」

武「だ、だめだ」

武、美弥につかみかかるのをサエが止めようとする。武、サエを引き倒す。真島がやってきて、武を投げ飛ばす。

真島「武さん。サエちゃんになにすんだよ！怪

我人だぞ」

武、怒鳴る。

武「み、認めねえ。お、俺が頼んだんじやねえ。違う！」

武、肩を怒らせて去る。サエ、涙をこぼす。

美弥「サエねえちゃん、ごめんね」

サエ「違うの。私のせい。美弥ちゃんに迷惑かけて。ほんと申し訳ない。情けない」

真島、サエをじつと見る。美弥、うつむく。近くに黒いヒキガエルが出てくる。

#### ○祭り会場

祭り太鼓が響く。山車や神輿に織物が飾られている。屋台には龍の面が並んでいる。

#### ○祭り会場

疾風と太田、連れ立って歩いている。通りますがる人が疾風の体のペイントを見て、くすくす笑う。

疾風「美弥が悲しそうって。満琉が？」

太田「そう言ってます。あれですか？龍の花嫁ってけっこう大変とか？巫女さんみたいな？」

疾風、笑って

疾風「巫女さんっていうか嫁ですよ。文字通り、龍の嫁。鬼嫁」

太田「鬼嫁？」

疾風「（ムチを振るまねをして）こうやって龍に言うことを聞かせて尻に敷いちやう。サエがピツタリだったんだけどなあ。残念だなあ」

疾風が屋台の店主に声をかける。

疾風「元気？やってる？」

屋台の店主「やってるよ。おまえこそブラブラしてないで働けよ！」

疾風「うっせいわ」

○祭り会場・全景（夜）

祭り会場と山の上の舞台に灯りが灯っている。太鼓の音が鳴り響く。

○舞台袖（夜）

龍の花嫁の衣装をつけ、正座し目を閉じる美弥。

○浜辺（夜）

疾風が電話している。太田、スケッチしている。

疾風「うん、祭りは古い帯でやることになったから。え？誰？オヤジ？機嫌悪い？知るかよ。爺のくせに無理しすぎなんだよ」

疾風、機嫌よく電話を切る。

太田「お父さん大丈夫ですか？」

疾風「（うれしそうに）大丈夫大丈夫。あいつ性根が腐ってっから天罰が下りやがった。ざまあみろ」

太田「ざまあみろって」

太田のスケッチブックを取り上げて見る。

疾風「あんた、画家？」

太田、スケッチブックを取り返して

太田「テキスタイルデザインです。織物を使っ  
たデザインやってます」

疾風「じろっと太田を見て

疾風「織物やってんの」

太田「スケッチブックをめくって疾風に  
見せる。」

太田「締龍ってあんまり知られてないですよね。

このデザインなんかすごく面白い」

疾風「オヤジのデザインだな」

太田「へえ、いいな。もっとSNSで宣伝した  
ら絶対売れますよ」

疾風「スケッチブックを押し返す。

疾風「締龍は島から持ち出し禁止なんだ」

太田「そうなんだ。もったいないなあ」

疾風「視線をそらす。」

疾風「このくらいのもったいないとか、まだ  
まだ」

太田「…あ、もつとすごいがある？」

疾風「あるよ。龍の花嫁が締める帯だ」

太田「龍の花嫁が締める帯」

疾風「それがホントの締龍」

ニヤッとする疾風。

満琉が太田と疾風のところにやってくる。  
上の方を指さす。

満琉「始まるぞ」

太田、疾風、満琉、上の方を見る。

○舞台（夜）

舞台の周りに篝火がたかれている。舞台  
の上に進み出て、中央で伏す美弥。目の  
前に黒塗りの表面に金文字が書かれた木  
箱が置かれる。

木箱は組紐で厳重に巻かれている。

太鼓の音。笛の音。

美弥の体が小刻みに震えている。

○山・全景（夜）

山の上の方で火がちらちらと動いている。

○祭り会場（夜）

疾風と太田、満琉、上を見ている。疾風、太田をつつく。

疾風「行くか」

太田「え？行くつてどこへ？」

疾風、早足で歩き出す。太田、ついていく。満琉もあわててついていく。

○同・山道（夜）

疾風、太田と満琉が急ぎ登っている。

満琉が疾風を止めようとする。

満琉「だめだよ。帰ろうよ。バチが当たるよ」

疾風「いいんだよ。のぞくだけだから」

太田「その捕まったりとか、大丈夫？」

疾風、満琉を振りほどく。太田、満琉を気にしながら疾風についていく。

○草むら（夜）

太田、疾風、満琉が草むらから顔をのぞかせる。

満琉「美弥だ」

○別の草むら（夜）

武が隠れて見ているが飛び出していく。

○舞台・前（夜）

舞台に向かっていく武を真島が飛びだして倒す。サエ、真島のところへ行き、

サエ「ありがとう」

真島「（武を押さえている）いや」

サエ「ねえ、この間の言葉って覚えてたり」

真島「ん？」

サエ「なんでもない」

サエ、元いた場所に戻る。

○舞台（夜）

太鼓と笛の音が更に強まると、ふいに木箱がガタガタと揺れ出し、組紐の結び目がほどけ、蓋が跳ね上がる。中から複雑な文様が描かれた帯が飛びだし、宙を舞い出す。

○草むら（夜）

太田、疾風、満琉がのぞいている。

太田「なんだありゃ」

目を丸くする太田。生唾を飲み込む満琉。

太田「帯が飛んでる。誰か操ってるの？」

疾風「もっと近くへ行こう」

疾風と太田、草むらを出て行く。満琉

もあわててついていく。

○舞台（夜）

コブラが鎌首をかかげるように帯が美弥の前に立ちはだかっている。

疾風と太田、満琉がサエたちの後ろから

舞台をうかがっている。

サエ、疾風たちに気づき目を剥く。

サエ「ちよつとあんたたち」

黒いヒキガエルの群れが舞台下に潜んでいる。

帯が蛇のように美弥の体に巻き付いている。美弥はじつとしている。

次の瞬間、帯は美弥を絞めつける。美弥は逃げるが、彼女の体に帯が巻き付き、引きずっていかれる。腰や首に帯が巻き付き、帯を解きほぐそうと暴れる美弥。帯の文様が一際輝く。疾風と太田、満琉。心配そう。力尽きてくる美弥。叫ぶ。

美弥「助けて」

真島に抑えられた武が叫ぶ。

武「み、美弥！」

倒れる美弥。

飛びだそうとする満琉をサエが止める。

サエ「だめ」

満琉「だって！」

サエ「しっ。見て」

倒れている美弥の目に光が灯る。起き上がると龍のように吠える。

帯、ひるむ。美弥、帯を手なずける。戯れる。帯も美弥に懐き、まるで恋人のよう。美弥、別人のように凛々しい。サエ、ホッとするが、うらやましそうな顔になる。

サエ「美弥ちゃん、綺麗」

美弥、帯に箱に戻るように指さす。

黒いヒキガエルが美弥と帯に向かって飛びかかる。

サエ「美弥ちゃん！」

満琉「美弥！」

武「美弥！」

ヒキガエルにとりつかれた美弥、必死で振り払う。帯、狂ったように美弥についてヒキガエルを払い落とす。疾風と太田、舞台上上がるが、帯に叩かれ倒れる。ヒキガエルをつけたまま、帯が暴れ回る。暴れ回る帯に火が燃え移る。燃え上がる舞台。

炎の奥に美弥。笑っているが、ふと魂が抜けたように崩れ落ちる。

武「美弥！」

美弥、横たわっている。火が付いた帯が守るように美弥の周りを回る。武は心配そうに見ている。

武「美弥、大丈夫か？」

疾風「武さん、見てないで助ける。自分の娘だろ」

武、おろおろしている。疾風と太田、美弥を抱きかかえ逃げる。焼け落ちる舞台。

サエ「帯は？帯は！？」

舞台の上で立ち上がったまま燃えている帯。

サエ、舞台上上がろうとするのを真島が止める。

真島「サエちゃん、やめろ！焼け死ぬぞ」

サエ「私はいいから。帯の火を消して！龍が逃げる。龍が行ってしまおう」

真島、サエを抱きかかえて逃げる。帯、炎の中で燃え尽きる。その瞬間、

黒いものが帯から飛び出て山の向こうへ消える。

○舞台（朝）

焼け落ちた舞台の跡。

疾風の声「昔。この島の海に一匹の龍が住み着いてた。ある日龍が海を渡る船に目を止める。と、船には一人の綺麗な女が乗っていた。龍はその女に惚れちまって、女を寄越せと嵐を起こした」

○イメージ・海の底

沈んでくる女。雄の龍がその周りをぐるぐる回り、女を背に乗せる。驚く女。水面から人の手が出てきて、女を引き上げる。龍は暴れ出す。

疾風の声「海は大しげ、島も波に飲み込まれそうになつた」

荒れ狂う龍。大荒れの海。恐れる島民たち。

疾風の声「自分のせいだと悟った女は嫁入り支度をして船の上から海に身を投げた。その途端、海は風ぎ、風も穏やかになつた。島は助かった。島の人間が船から海をのぞくと、龍が女の言うことをおとなしく聞いていた」

嵐の去った浜。

疾風の声「これが島に伝わる龍の花嫁の伝説」

○島・外観

雲が立ち込めてくる。

○機織り小屋・内

雨の音。

出来上がった黒い帯をそつと撫でる昭二。

昭二「綺麗な子だ。おめえに勝てる奴はいねえ」

○プレハブ小屋・内

雨音の中、疾風が鮮やかな帯を眺めて



いる。

○島・外観  
海がしけている。

○同・町  
激しい風雨にさらされている。

○日高家・外観  
激しい風雨にさらされている。

○旅館・外観  
激しい風雨にさらされている。

○旅館・ロビー  
テレビの前に観光客が集まっている。

天気予報士「おかげ島近海で突発的な荒天が

起こっています。海が非常に荒れており、  
船が近づけません」  
フロントに観光客A Bが詰め寄っている。

観光客A「なんとかしてくれよ。もう一週間  
もこの島に缶詰なんだよ」

フロント「申し訳ございません。この天気です  
すからねえ」

観光客B「ヘリとか飛ばしてよ」

フロント「ヘリですかあ。この天気ではねえ」

観光客A「何笑ってんだよ」

カッパを着て雨に濡れた疾風が観光客  
Aに話しかける。

疾風「俺、船出せるよ。出そうか？」

観光客A「ほんとか？」

疾風「その代わり、すごい揺れるよ、この天  
気だし。海に放り出されるかもしれない  
し、船も沈むかも。それでもよかつたら  
どう？」

疾風、ニヤリとする。

○トシの家・大広間

布団に横たわるトシの前に疾風と昭二、  
神主が座っている。嵐の音。疾風の前  
には鮮やかな帯、昭二の前には黒い帯  
が置かれている。それぞれ龍の文様が  
入っている。

神主「龍はこの島の守り神。龍が逃げるとこの  
島に禍が起ると言い伝えられている。  
空に放たれた龍を早急に新しい帯に迎え  
ねばならん」

神主、トシを見る。

神主「婆様、どちらの帯を」

疾風、唾を飲み込む。

トシ、震える指で指し示す。

○美弥の家・内

美弥と武、食卓で向かい合って座って  
いる。武、うなだれている。

美弥、席を立つとドアを開けて大雨の  
中、出て行く。武、顔を上げて

武「美弥」

うなだれる武。机の上で手つかずの祝  
儀袋。

○祠・外観

しめ縄が張ってある洞窟。雨風激しい。

○祠・内

紋付袴をつけた昭二と神主が奥へ進ん  
でいく。昭二は帯を入れた箱を捧げ持  
っている。美弥が後からついていく。

○プレハブ小屋・外観

激しい雨風。

○プレハブ小屋・中

机の上に鮮やかな帯が置かれている。

うなだれている疾風。戸が開き、太田  
が入ってくる。黙って椅子に座る太田。

疾風「どこか行きてえなあ。この嵐がおさま  
ってから。狭い島は飽き飽きだ」

太田、疾風を見る。

疾風「東京に行こうかな？」

太田「そんないいところじゃないですよ、東京も」

疾風「でもこの島より広いだろ」

太田「人は多いですね」

疾風「じゃあ、その中に俺を認めてくれる人もいるかもしれない」

太田「俺は東京で認められなくて、この島に来たんですけどね」

疾風「マジか」

太田、苦笑している。

疾風「とりあえずコーヒーでも飲もうか」

太田「酒にしません？」

○祠・泉

祠の奥にしめ縄の張った泉。その前に帯が置かれていた。

神主が汗だくで祝詞をあげている。昭二と美弥は汗だくで頭を下げている。

○プレハブ小屋・内

真島が戸を開ける。振り向く疾風と太田の手にはコーヒー。

○トシの家・広間

トシが布団に横たわっている。その前にくたびれた様子の神主と昭二、美弥が座っている。疾風、真島。サエが入ってくる。

神主「降りてこん。何かが違うんじや」

昭二「何が違うんだ」

神主、黙っている。

昭二「（疾風に）何が違うと思う」

疾風「知らねえよ」

昭二「そんなこともわからんのか。素人だな」

サエ「帯かな？」

昭二、サエをにらむ。

昭二「俺の織った帯がいけねえってことか？」  
サエ「え、消去法で考えたらそうかなって」

昭二「自分は勝手に花嫁降りておいて、俺の作った帯は批判すんのかよお」  
疾風「サエに絡むなよ。じゃあなんだよ、答えは！」

昭二「帯だよ！」

疾風「帯じゃねえかよ」

昭二「俺の織った帯の何がいけねえんだよ」

疾風「知らねえよ！」

トシ「なんも悪くねえ。相性の問題だ」

全員、トシを見る。トシ、両手の人差し指をちよんちよんしている。

トシ「オトコとオンナも相性ってあるだろ。」

昭二「相性。(うなる)(疾風に)帯持っ

てこ

疾風「えっ。それって」

昭二「(神主と美弥に頭を下げる)うちの息

子の帯でもう一度お願いします」

神主、うなずく。疾風、信じられない

といった顔で立っている。

昭二「なにしてたんだ。早くしろ！」

疾風、サエ、真島、神主バタバタ出て

行く。

昭二、がつくりしている。トシ、手招

きする。

トシ「えらかったな。頭なでるからこっちへ

おいで」

昭二「いい」

トシ「遠慮するな」

昭二「してない」

○プレハブ小屋・内

座って帯を見ている太田。疾風が勢い

よく戸を開け、太田立ち上がる。疾風、

息をはずませている。

太田「どうした？」

疾風、帯を抱えると笑顔

を太田に向

け、去っていく。

○和室

サエが美弥の衣装を整えている。美弥、ふらっとする。サエ、抱きとめて  
サエ「美弥ちゃん、大丈夫？」  
美弥「大丈夫」

○ 祠・外観

○ 祠・内

泉の前に疾風の帯が置かれている。  
神主が汗だくで祝詞をあげている。疾風と美弥は汗だくで頭を下げている。  
美弥の額から汗が流れ落ちる。

○ 祠・外

入口に黒いヒキガエルが一匹やってくる。

○ 祠・内

神主の祝詞が続いている。美弥、息遣いが荒くなる。疾風、そっと美弥の肩に手を置く。美弥が倒れる。

疾風「美弥！」

○ トシの家・和室

布団に寝かされている美弥。

○ 同・広間

昭二の帯、疾風の帯を前に昭二、疾風、真島、神主、サエが座っている。

神主「ダメだ。何が悪い？相性か？」

うなだれる疾風。

疾風「俺の帯もダメか」

昭二「残念だな」

疾風「うれしそうだな」

昭二「そうか？そんなことない」

昭二がサエを見る。

昭二「サエ、もう一度、花嫁やったらどうだ」

サエ「私？でも私は」

サエ、変色した腕を触る。

昭二「相性があるんだろ。花嫁も替えてみる」

べきだ」

真島「ヒキに侵されたものは花嫁にはなれんはずだ」

昭二「この際やってみよう」

真島「しかし！」

神主「しかし。万が一龍が怒ってしまった二度と戻ってこなかったら」

昭二「今のままではどの道、龍は来ない。と

思うがどうだ、サエ」

全員、サエを見る。サエ、真島を見る。

真島、目をそらす。

サエ、うなずく

サエ「やってみる」

神主「さあ。では帯はどちらを使う」

昭二と疾風の視線が合う。

○同・和室

美弥が横たわる布団の脇にサエと武。

美弥とサエは手を握っている。

美弥「わかった」

サエ「ごめん。美弥ちゃん、がんばったのに」

美弥、笑顔で首を振る。

サエ、立って部屋を出、障子を締める。

美弥、布団を頭までかぶる。

武、布団にそっと手をかける。

武「な、泣くな。こ、これでよかった。あ、

あのお金もちや、ちゃんと返そう」

美弥「違う。私がちゃんと花嫁やれてたらこ

んなことにならなかった」

武、あやすように布団をそっと叩く。

○同・廊下

和室から出てきたサエ。真島が立って

いる。サエ、真島の顔を見てから、通

り過ぎる。

真島「サエちゃん」

サエ、足を止める。

サエ「真島さん、ありがとうね。私のこと好

きって言うてくれて。うまく言えないけ

ど……うれしかった」

真島「ごめん」  
サエ「もう。なんで？そこで謝らないでよ。  
間違いだっただみたいになるでしょ！？」  
真島、もじもじしている。

○ 祠・内

泉の前に黒の帯が入った箱が置かれ、  
神主と装束をつけたサエ、紋付袴をつ  
けた昭二、真島が座っている。神主が  
祝詞をあげ始める。

○ 祠・外

入口に大量の黒いヒキガエルが集まっ  
ている。

○ 祠・内

神主の祝詞が続いている。

神主「この帯に降り奉り候ことをお願い申し  
上げ候。ここにおおわす娘・サエを花嫁と  
して迎え入れ奉り候ことをお願い申し上  
げ候」

神主、祝詞終わる。泉の水に波紋がで  
きる。ドウドウと地鳴りのような音。  
皆、不安そうに泉を見つめる。昭二が  
叫ぶ。

昭二「うわっ」

祠の中に大量の黒いヒキガエルが入っ  
てきている。

昭二「なんだこりゃ」

神主「こりゃあ、ヒキだ。災いの元だ」

真島「サエもこれにやられたんだ」

昭二「すげえ数だ。ぞつとするな」

閃光が走り、帯に雷が落ちる。昭二の  
帯が生き物のように立ち上がる。

昭二「やった！」

帯が昭二に突撃し、昭二倒れる。

帯、人間たちの周りをぐるぐる回る。

神主「龍が帯に入った。サエ！」  
サエ、うなづく。

サエ、進み出て腕を広げる。変色した腕。真島、サエを見つめる。帯がサエの前で立ち止まり、吠える。サエ以外  
の者、身をすくませる。サエ、腕を広げたまま近づく。

サエ「龍よ。受け止めて。受け止めて、私を。お願い」

サエ「サエ、帯に抱きつき、組み伏せる。

サエ「受け止めて。私を受け止めて。私があ

なたの花嫁よ」

暴れる帯。サエに絡みつき、締め上げる。

昭二「プロレスみたいだな」

神主「う、うむ」

真島「サエちゃん、しつかり」

昭二「サエ！俺の帯、傷つけるなよ！」

苦しむサエ。帯に締められてサエが失

神する。真島、帯につかみかかる。

真島「やめろ！サエを返せ、龍め！」

神主「昭二驚く。

神主「真島！やめろ」

真島、ぐつと帯をつかみ引つ張る。布

の裂ける音。蒼白になる昭二。

昭二「うわあああああ。俺の帯——」

○トシの家・廊下

歩いている美弥。部屋の襖を開ける。

○トシの家・広間

襖を開けた美弥。口を押える。

トシがいたと思しき場所に黒いヒキガ

エルが無数にたかっている。倒れてい

る点滴。

美弥「婆様！」

無数のヒキの中からトシの腕が出て、

行くと合図する。

美弥、ためらうが踵を返す。

○トシの家・玄関・外

駆け出す美弥を武が呼び止める。



武「美弥！行くな！」  
美弥「美弥、武を見る。」  
美弥「お父さん。私が行かなきゃダメなの。」  
武「美弥、い、行くな。お、おまえまでいなくなったらお、俺どうしたらいい？」  
美弥「お父さん。私を信じて。」  
美弥「美弥、走り去る。」  
武「美弥！」

○ 祠・内

ぐったりとしたサエを真島が抱き起している。側に落ちていた裂かれた黒い帯。がっくりしている昭二と神主。

真島「サエ！サエ！大丈夫か？」

昭二「畜生、俺の帯を。」

神主「なんてことを。せつかく龍が帯に戻ったのに。」

真島「血も涙もないな、サエが殺されてもよかつたのか！」

昭二「血も涙もないのはおまえだ。俺がどれだけ精魂こめて織ったと思っただ。この糸の一本一本が俺の血と汗と涙だ。縦の糸は俺で横の糸も俺なんだよ。その100パーセント俺の帯をよくも。」

神主「昭二！喧嘩してる場合か。ここから逃げること考えろ。」

黒いヒキガエルたちに追い詰められている昭二たち。

昭二「もうダメだ。この島全滅だ！」

神主「縁起でもないこと言うな！」

美弥の声「美弥だよ！」

ヒキガエルたちの向こうに美弥が現れる。

真島「美弥。」

美弥「叫ぶ。」

美弥「サエちゃん！」

昭二「美弥、いいから逃げろ。ここは危ない。」

真島「そうだ、逃げろ、美弥。」

昭二「おまえが言うな！おまえのせいだろ！」  
神主「喧嘩するなって言うのに。」

美弥「逃げない。だって私、龍の花嫁だから」  
真島「え？」  
美弥「私が龍の花嫁になる。神主のおじさん、お願い」  
神主「しかし帯が」  
美弥「大丈夫」  
美弥の後ろから疾風が現れる。  
疾風は自分の帯を持っている。  
疾風「帯だ！」  
疾風、神主の方へ帯を投げる。  
昭二がキャッチして、疾風の帯を見てから振り上げる。  
疾風「オヤジ！」  
昭二、舌打ちすると疾風の帯を泉の前に置く。神主、美弥にうなずいて再び祝詞をあげ始める。一心に祈る美弥。  
真島の腕の中で気づくサエ。  
サエ「真島さん」  
真島、サエを抱きしめる。  
サエ「真島さんはまた私を助けたのね」  
真島「体が勝手に。どうしてかわからない」  
サエ「うれしいよ」  
真島「サエ、美弥が来たんだ」  
サエ、気づいて起き上がり、美弥を見る。  
サエ「美弥ちゃん」  
美弥「サエちゃん。私、もう譲らないよ。私がやる」  
サエ「美弥ちゃん」  
美弥「美弥が龍の花嫁なの」  
黒いヒキガエルが一斉に美弥にとびかかる。  
サエ「美弥ちゃん！」  
祝詞をあげる神主。  
閃光が走り、疾風の帯が立ち上がる。

○機織り小屋

太田が機織り機を撫でている。側に積みあがった糸に目を止め、手を伸ばすと、糸の中から大きな黒いヒキガエルが

出てくる。太田の叫び声。

○機織り部屋

まつが機織りをしている。ふと後ろを振り向く。首を振りながら、戸を開ける。廊下に黒いヒキガエル。まつの絶叫。

○旅館・ロビー

客・スタッフたちが黒いヒキガエルに取りつかれ、悲鳴を上げ右往左往している。

○港・栈橋

黒いヒキガエルがあちこちにいる。

○祠・外観

サエの声「美弥ちゃん！」

○祠・内

黒いヒキガエルにまわりつかれた美弥。疾風が手でヒキをはがしている。

疾風「こいつ、美弥から離れろ！」

サエが駆け寄ろうとして真島に抑えられている。

サエ「美弥ちゃん！」

疾風の帯が美弥まで飛んで美弥のヒキを払い落とす。ふらつく美弥の周りをぐるぐる舞う。美弥は疾風の帯をまとい、目に力が宿る。疾風、感動に打ち震える。

疾風「おお」

神主「龍の花嫁だ」

美弥は吠え、外を指さす。帯、美弥の体から離れ、祠の外へ飛んでいく。

○日高家・外観

まつの悲鳴。

○同・機織り部屋

まつと満琉が絶叫しながら物差しで黒いヒキガエルを追っ払っている。

まつ「あっち行け！あっち行け！」

満琉「どこからこんなに入ってきたんだよ！」  
帯が飛んで入ってきて、ヒキガエルを一網打尽にする。呆気にとられるまつと満琉。帯は窓から飛んで出て行く。

○旅館・ロビー

黒いヒキガエルに取りつかれ、悲鳴をあげて逃げ回る客・スタッフたちの周りを飛ぶ帯がぐるぐる回り、ヒキガエルを一掃する。呆気にとられる客とスタッフたち

○プレハブ小屋・外観

太田の悲鳴。

○同・内

太田が黒いヒキガエルたちに部屋の隅に追い詰められ、糸玉を投げている。

太田「こつち来んな！俺、この世で一番苦手なのがカエルなんだよ！」

窓から入ってくる帯。目を見張る太田。太田「これは疾風くんの帯……」

帯はカエルたちの間を飛び回り一網打尽にする。投げた糸玉が舞い上がり、空中で様々な色が絡み合った景色を一瞬作る。太田、見とれる。

○栈橋

ヒキガエルの姿は無くなっている。

○祠・外（夕）

美弥が空を見上げている。

満琉と太田が走ってくる。

満琉の声「おーい」

美弥は振り返るがすぐ空を見上げる。

満琉は不思議そうな顔をして、太田と

顔を見合わせ、共に空を見上げる。

空から帯がゆつくりと降りてくる。

美弥の腕の中へ帯が舞い降りる。

見とれる太田。口を開けている満琉。

帯を抱きしめる美弥。  
美弥の腕の中へ帯は収まり静かになる。  
祠の中から神主、疾風、昭二、サエ、真島が現れる。

美弥は帯を神主へ渡す。  
神主、恭しく受け取る。

神主「新しき龍の帯だ」

箱の中へ入れ組紐で封をする。じつと見  
つめる疾風。

見守るサエ、真島。昭二。

太田、その光景を見つめている。

○プレハブ小屋・外観（夕）

○プレハブ小屋・内（夕）

床に糸を並べて、図案を紙に書いている

太田。機織り機を撫でる。

天井を見上げ、目を閉じる。

夕焼けが部屋を照らしている。

○日高家・庭（夜）

昭二が掘った穴に自分の織った帯を入  
れて、土をかけている。

× × ×

ややこんもりとした塚を昭二が拝む。

昭二「ありがとさんでした」

縁側からまつが見ている。

○港・栈橋

帰り支度の太田。疾風と満琉が側に立  
っている。

満琉「兄ちゃんの運転で行くの？やめといた方  
がいいよ」

太田「そうなの？」

疾風「余計なこと言うな。俺が東京に行ったら

世話になるんだから、恩を売っとかなきゃな」

太田「ははは。任せとけ」

満琉「おじさん、元気になったね」

太田「そう？」

うなづく疾風。ニヤツとする太田。

太田「あ、そうだ」

太田、折った紙を満琉に渡す。

太田「これ美弥ちゃんに渡して」

満琉「美弥に？ 見てもいい？」

うなずく太田の肩を昭二が出てきて叩く。

昭二「そろそろ行くか」

昭二の出現に皆、驚く。昭二は旅支度。

疾風「なんだよ、オヤジ。旅行でも行くのか？」

昭二「うるせえな。巷を見に行くんだよ、巷を。

この島は俺には小さすぎる。(疾風に)おら、

さっさと船出せ」

さっさと船に乗り込む昭二。太田と疾

風、顔を見合わせる。

### ○ 棧橋

手を振る満琉。

満琉、紙を開いてみる。

凛々しい美弥の絵。満琉、にっこりする。

### ○ 岬

岬の先端に佇む美弥。離れて武が立っている。サエと真島がやってくる。

武は黙って立ち去る。

サエ「美弥ちゃん」

美弥、振り向く。

サエ、美弥の首に自分の首から首飾りにかけてやる。

サエ「似合うよ。とても」

美弥、首飾りを見てサエに笑顔を向ける。サエと真島、微笑む。

海を見ると一艘の小型船が走っている。

### ○ 海

荒い運転で進む小型船。

### ○ 小型船・内

上へ下へ揺れる船。疾風が操縦し、太田と昭二が必死にしがみついている。

太田「おええええ」

昭二「おええええ」  
疾風「ひゃっほー」

○ 小型船・外観

海でキリモミされている小型船。

太田の声「うええええ」

疾風の声「はっはあ」

昭二の声「疾風！もう少し丁寧に運転しろ！」

○ 空

（イメージ）龍と美弥が笑い合い、む  
つみ合いながら空へ昇っていく。二人  
絡み合い、スツと海に落ちる。

○ 海面／海中

（イメージ）龍と美弥が落ちて盛大な  
水柱があがる。海中で龍と美弥は微笑  
みあいながら海深く沈んでいく。どこ  
までも。

○ 日高家・プレハブ小屋・外観

○ 同・同・内

機織り機の織りかけの織物。  
脇に積んである糸の束や、機織り機に  
かかった糸。  
機織り機の脇で紙に書き起こした図案。  
×  
機織り機の横で柔軟体操をする疾風。  
指を開いたり閉じたりし、手をじつと  
見る。深呼吸する。  
×  
×  
×  
何かに取りつかれたように機織り機に  
向かう疾風。  
糸が絡み合い絡み合いして、  
少しずつ織りあがる布。  
機を織る音が続いていく。

終わり

・「参考資料」

手織りの西陣織を1000年先へ残すために。  
機織り機を修理したい（池口 寧祥  
2019/10/31 公開）  
ー クラウドファン  
ディング READYFOR（レディーフォー）

緞帳・美術工芸品ー川島織物セルコン  
(kawashimasei.kon.co.jp)

日本の織物とは？種類や歴史、日本各地の織  
物をご紹介ーワゴコロ (wa-  
gokoro.jp)

首里織とは？ー沖縄伝統の織物ーワゴコ  
ロ (wa-gokoro.jp)